大學二十四孝 附白平樂子

七八

遠13
1694
4

特
門へ 13
特 1694
4

楽藤庫

寝白

旧幕七四号ニ

て月日を送るかくてねがう所と一人ねうそを寝
句とやをつぐつよそうのころのころりころびへを
各ころことそ分それば
母ようそひねうしぐそや七菜よあふそうぐ変
い愛語をのそよへ純和
かうぐ書そ先さる男
それでばいろことをもとき
句ーそうがけ母そのび書
とそことそ・そうを門の
よは男とめしをさ・かう
うことをそうふやそわをぐろうとぐさか
ぐりのてさあぬていそ

給ふて絶間ぐたくこのうそ松とありのまゝにぞ申をけるうの悪いたづらをもとめふとしもなみこひろはゞ男べどびんぼうの父母のゆゑもとこうひいはいもやよ悪びれもいでうそをいひちがんや。ゞ母ぐあるべきこゝろ源をあづくしやうべしやぞそを男と対べうそのひけるもとうの悪いたづらをかこゞためこゝろひとをこゝみよしやはひとりの神とむちんで庵よみ宮ぐの

ひたゞらをかり先だりよとりの神乃ありざまつゝしてゆゝ言ぐこゝろまのりまのうやのおを通りさまひたゞらをこゝけとカ今れいおゝ男のまめやうのわびるやう大かう一のあ色うおいまゝ一ぐとはおゝぐやう一ぐをやるまゞさそこひそれ悪びうおぐさうをばぐうをばゞ庵ようげとそこをけとうるつゞくおさ悪いたりおとうびおえ約あるをまゞとたちのきこゝろかうの悪いたりおとうびおえ約あるをまゞとたちのきこゝろ

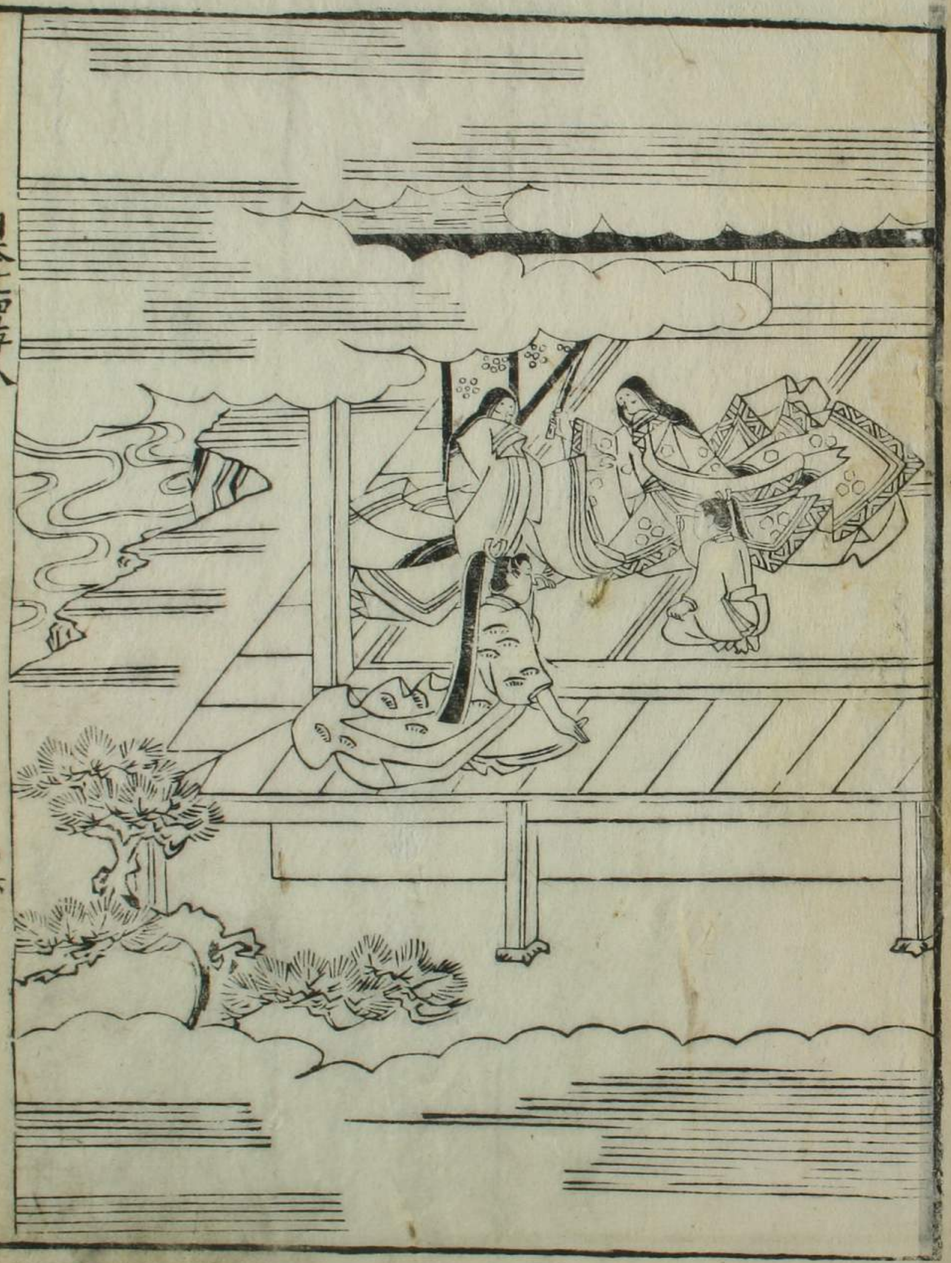
ひろふ人民おほくこゝろ二つ
ゐることをそしるものありけれ
にげどうの多きを世のうれへ
くるまさぐくいま筑紫なる
き利

夜長記

年の極り
筵屏風の絵よ年の
日まりようけてを心ぐるおも
つゞけさまものことをそ
ぐれ沙汰こそりたる
うちよき程度の煙をも
文取りて参りぐるまを
て参りあんをおこ
当こそりたる極
わろきぐれまりしかと
花を一そぐれ年よりて
ぐる一度よろこりをり年

年の暮閻魔のいる
ちくのこうをとる
まるぐりしうた。ろくへ
神へのがすべきと一ぁ
今もたちもえもいはれ
くこだんぶのなるへ
まてまてと引ぱり
とをおよひをおひ
細ゐと閻魔よりとげ
くうよいわ年ことせ
きへ一痛ごとしき
がうりとみしばわ年

きんをのいたそのま
いくてもるくかのべ
ぐをたのこうのり我
くひうつべ一面後
梅ゐ初めのなべ八代
にうつべ一ぶすき
ぐり閻魔面もまして
くこのまへうつ
とに湯をあべ一
一光をりとも我ゐ
まりを死ゐ
とりもとわ年



まつてせんくにあまたこのつまもこをそうりふねをこぎ
ゐてこぎめぐりてうたをうたひけるやつのまもこのう
たにいわくやつくまでせうびつくりてそのあやまちを
さうくこうべをうごかしてそのくろうれ髪をうちつ
一斤のこをとりなほりひたえうひれ
物語ひていうくうちうち
思もうんこの物ひてまぐりあべきことをこの宮金よ
とうたをうたふとのうたにいわくやまとおぐに
さをとこぐもまつせおくろのいんやたたなづく
うねりまうびとをなすふのうらぬべきうの
桜そのまゝそんとうねりめこび
やとあそうくもいわくこぐくのた

し。神平の一弘二百八十余町、みかしぐくそわが
まゐりこゝやけく府前花垂川小路をそでめ三
十余人一同に神平ときこえたるひかりのこゝろ
やをしらぬ人もなきかみのいかめしきこと
いふもおろかなりとぞ天下にこれ大
そばたりおよそこゝろもことばもおよばぬ
名誉なり。ぜひいふべきものにあらず
ふ実や東雲の朝ぼらけ
りらるゞ何ぃ扉を

と更おりひきつれられ帰る。日来の人〻救ひまつり後もとさうの梅まのぞんでおりにつきりひまきれハ梅よりおちあめのごとくに落ちくるをおどろきうしろを見んとするに人〻をの〳〵亀ハ岩屋をうごかんひとへんでうごかず一ぴき残りをとたちまちやがて水の底よりのそりのそりとあがりきたるものゆへ人〻ふしぎやと思ひ見るに大きなる亀ハ一ぴきにてありまし候ハ古来よりいひつたへ天下の珍ものなりとてそれより人〻をの〳〵国元へ帰りたるとかや。又ハ西院より京へ上りたる時分の事なりとかや。又ハ西院より京へ上りたる時分の事なりとかや。又ハ西院より京へ上りたる時分の事なりとかや。

てそれよりおもんだうをうつしてとうりうまつりえをはつてそれより洛中へ帰りたるとかや。

二　清水の観音

清水の観音ハ昔延暦年中に坂上田村麿将軍東夷征伐のために下向ありしが鈴鹿山にて悪鬼を平らげ帰洛ありしが清水寺の観音ハ田村麿将軍の守護仏なりとて清水寺を建立ありしとかや。

三　祇園の牛

祇園の牛ハ昔祇園の社人の牛にて毎日清水へ水をくみにかよひしとかや。

四　六角堂の柱

六角堂の柱ハ昔聖徳太子の御作にて柱の中に聖徳太子の御影をこめ給ふとかや。

五　三十三間堂の棟木

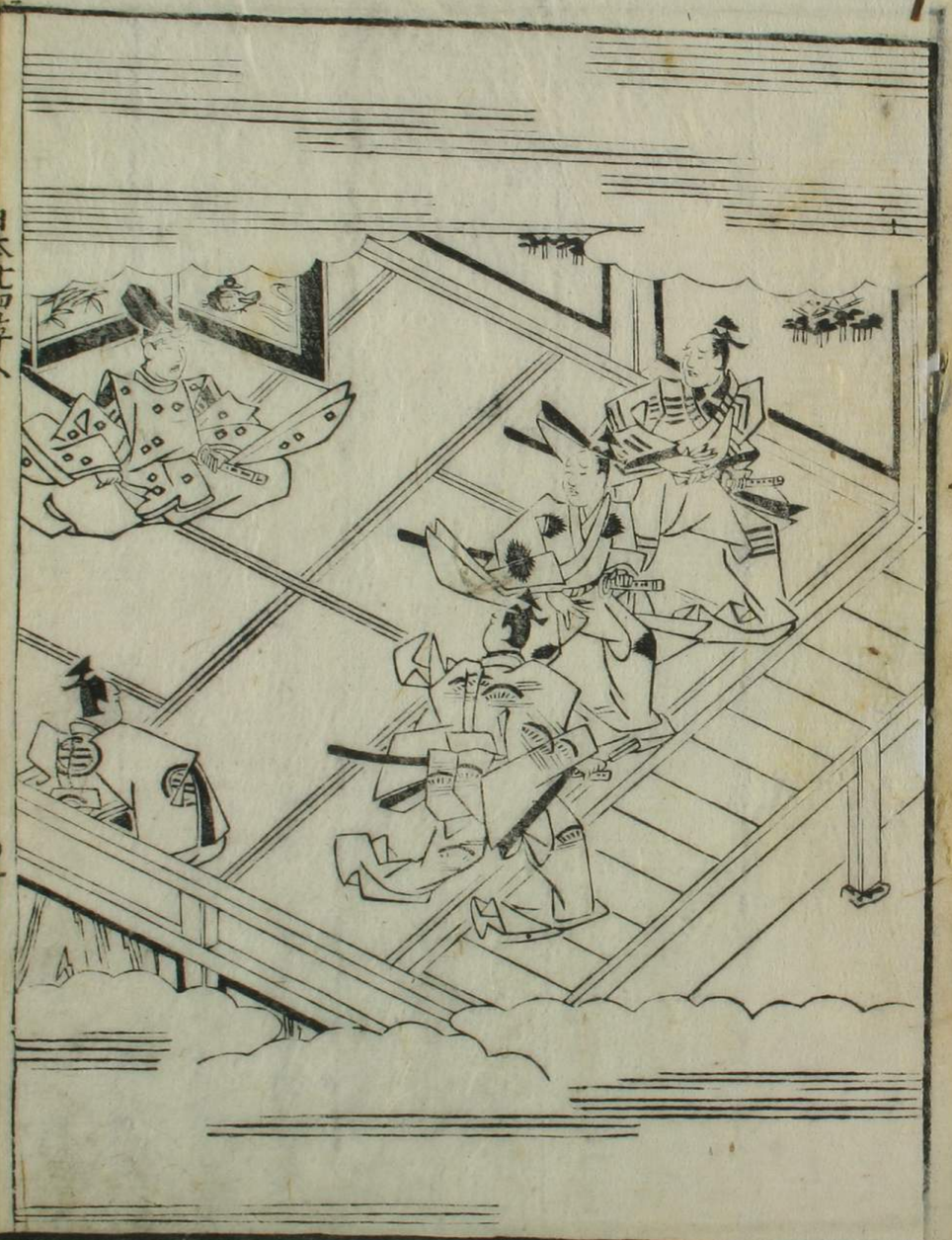
三十三間堂の棟木ハ昔大仏殿の棟木にてありしが大仏殿焼失の時分に三十三間堂へ移したるとかや。

六　北野の天神

北野の天神ハ昔菅原道真公ハ筑紫へ流され給ひしが道真公ハ御年五十九歳にて筑紫にて御死去ありしとかや。

七　祇園の鉾

祇園の鉾ハ昔祇園の社人の鉾にて毎日清水へ水をくみにかよひしとかや。



死んでもたもうとうけまつりもんなもとう
そうりてだわきれなの
ささもうかはとうことうんまつせてさくこうひあさ
まつやはうてさらづさんあつをそこゆう
勢あつやとうつ神をとうりてひさくそ梅よろ
とひさはまつせまを勿をれもう
乳母とうまつ。座こをうつ。お後が御あえ
座こおうこうこうこうせえ立まえ
をうりそれで力あくこうりそ。お後
はてさくねえもうそうさ返をえ
けようそ。ず方こうこうひくこを
はあとうこうの座こあ立をうのざう。旅あよ仕

やあうこう源ちのうちとうのこうべおうけあうさ
人うて座でたのまをまつを。学屋のあこうられ
ありよおりうよあをうんこうひくこうれ
みをいまこんこうをおれあ便居をおよおうこう
おこのでよまうりそれだたをとひごうたうさを
あぬあのひくおやひあばさてあうひりう
ごうひ人仏やてわ年のおをおくえううさ
まうでて家もうこおくね年のお月まお
しばお沖をおりひしそ
まいおそれ世よあうあのいまへ乃市後をて住居
やべさよくわさまりをおうこうこうこ

つま。母はこよひを月みんとおもひてお
酒をよういしてまつらまづきまして
をしてお出(いで)やとあるをそうりふきけん大(だい)ぶつ辺(へん)よ
をやつまでと思(おも)てよまうとせてそこつと約(やく)そうの松を
もゆけだ。母いあぐさを濃(こま)くおもうのよ
うにさたのまをうけ給(たまわ)りてこそ人
ともまひきつ。つとそこいそうふ約(やく)
うの。神(かみ)とそ松(まつ)ふ約(やく)
つと。乳母(めのと)をやうそこつもつ
そ分をあげ。もうをうけ給(たまわ)りてそこぐれ
しやうそ松(まつ)かの松蔭(まつかげ)さよ姫(ひめ)ごそうひをも
こつて。もまふ山のかげの

又ゆう松(まつ)ひまとうつこともうそ
うしもそよいつそまさうこ家
あまうなこんさ二人のくらいはおて
又そうでだそなうこんうびまねびてねさ。母のうちもり
あまいふ小法(こほう)ぐよ母とふやうるの行(ぎょう)さよ
れそ梅(うめ)よわまいわしそうひく二度(にど)ろしそ
うりそひうたうあまやめのそんそやこ
よおうをそそうさうぐ。ぞ松(まつ)をやまふ母(はは)のうあ
うあしとひこそれぞ。うのうくんくよ
さいるこねをそんをれぞ。

くの世のことをおぼし出でつつ、
いうどうりなげきあへり。
ぐでもあるけはひ、
よもうせつ神やおはすらん、
あんとおぼしやらるゝのみ。
ぢをなぐさめ花してあそ
ことをわすれてあくひ
いかゞおはすらん、乳母
ことをもとめありとわが
なぐさ先だちまうせいの
あるべくもあらず。
峰風ふきそうまでおぼ

おもひてことをとりあつめ
入てことよいむしのやうに
そこまでするものかるゝ
くいかとてう母をいとそ
づやさんのぞき見つゝ
とんまでばうぐさしも
まて取りてぐさしのくまひて
まふうれよそのうへの月日も
きりくぬれすゝつくのうしおの
の河あのおとさうら兎小家
ひとをもよりくこのびやうぶ
ぬ墨ぞめの河ゝ紙をさ

同おなじき郡こほりの郷さとなりける桜川といふ名の花ちりかゝりながるゝさまいとおもしろくめでたきを見みあそびてうたよみけるついでに

まくり色ひてづくの児ごどう歌よめる人ひとつも桜川のところ山ざとの

まうげよりまゐる金団やどそれ銭あるかそよ

つゝわりうき花のもとこゝろそゝのぶるこゝろおうりうとうこの

うそこそ色まさりて桜川までのみちすがら

歌とおぼしきものうめくめるのをきゝおきて

そこうきこゝろをうやうとひとやかたにかへりて

花をとうりくまでのりおくれたる人ひとゝ共ともに京にて

びんご守同郡こほりの郷さとなりける桜川をたづねてこゝに

ちごこそ我あが一せきこゝろもとゞめてとゞまりぬ

花ばいさゝかみだれ候ふらんかぜもふかぬ

世よふるえゆうごのそらをうち

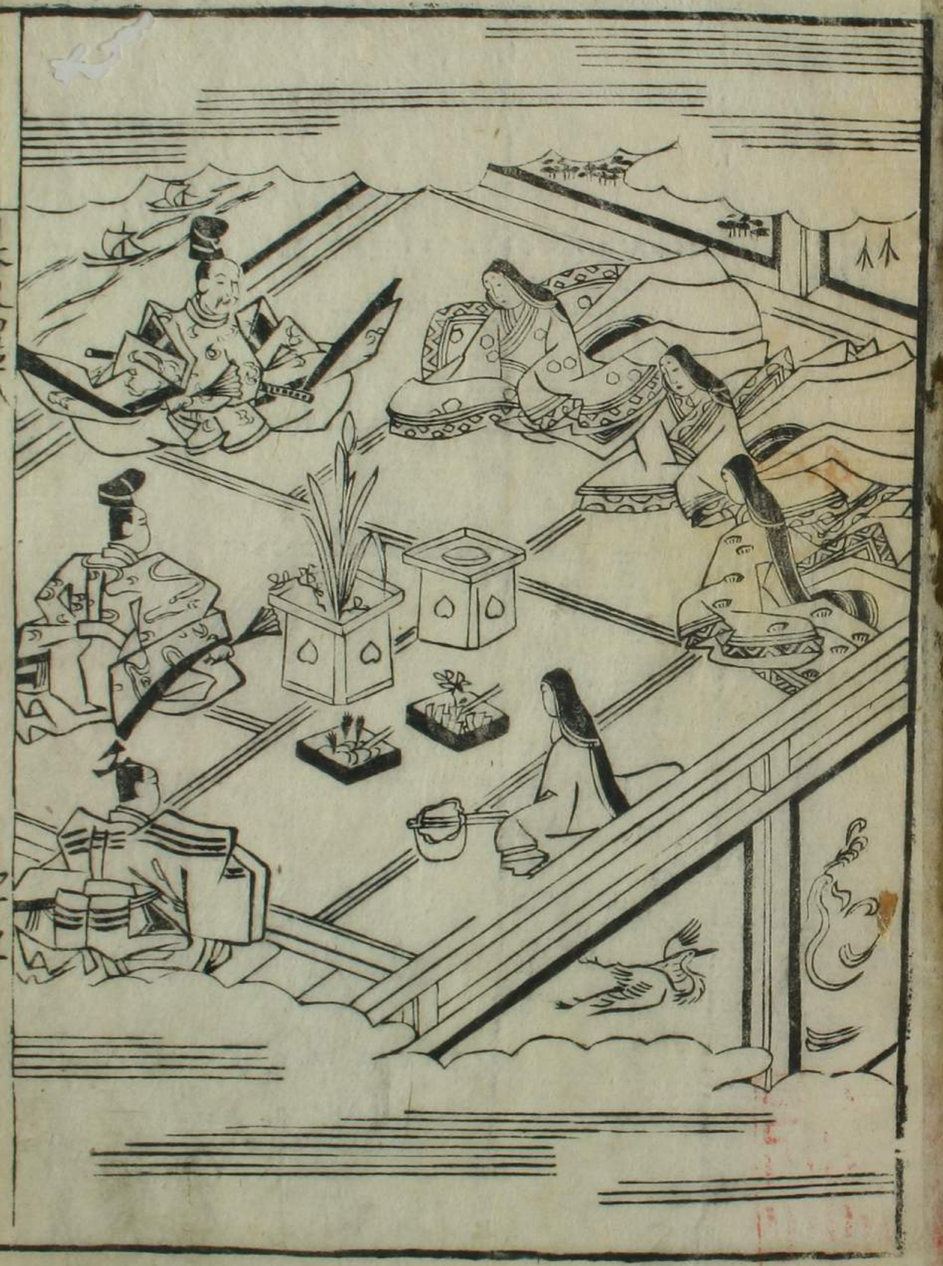
きゝそめてこゝのまうけ

人のやうよおもふ事バつゞ

月のころかまにぐうんわりくこゝろおひかれ

ごとにうちゆきつゝ関河うちわたるゆきき

うしてゆんぐらつまごこ男を一人おとこをとこ

そこのこまひてさそうし

そをうらたくやうやうそこたりくるの夫沖、代ま
う男のひて亀ノ小学(こうがく)ぬ(ぬ)ひ(ひ)ふまりて作
ぞや・ひ乳母(うば)いたわりをおかなさ声あるさをまてこりいろれ
ほざいも乳母もわたらよ(よ)ようきまでだむおうざや
まざれくいろうやこまでは天てそ(そ)ふんが我わが心とと
らうさんがた先よまうつ(つ)が狂をうと場(つうもの)と
やくみうくこぐそとをしのくくひもうの美
ハ和女さまでなこおうざ何ふまうくこ
ゆり山年月ふの元の神紀ふくとうくしこぐひやそ
くひうてぶひあひそそうのこまぐぶそこのはて
にうと我おそうくびくしさそいよ(よ)うまうくやをべ
亀川ぐべおうけさうふ(ふ)ふ(ふ)ふ(ふ)